

流れ弾かすめた日からある祈り

ラーゲルの詩人になれる円い月

ああ雲は遙かほるかな母の膝

きつと吹く風を信じたコーカサス

声かぎり半端じゃないぞおいダモイ

シベリアに向いた足元洗う波

難民の姿シベリア遠からず

有事立法右向け右は怖い道

(京都府 西川 貞行)

シベリア抑留記

島根県 本田 吉 則

まえがき

昭和二十(一九四五)年八月十五日第二次世界大戦が終結して、はや五十七年の年月が流れた。

戦後生まれの世代は全人口の三分の二を占め、戦争時代の体験者は年毎に減少し、あの悲惨な戦

争に関する意識の風化が進んでいる。

第二次世界大戦は、連合国が提示したポツダム宣言第九項「日本国軍隊ハ完全ニ武装ヲ解除セラレタル後各自ノ家庭ニ復帰シ平和的且生産的ノ生活ヲ営ムノ機会ヲ得シメラルベシ」の通告を日本国は受け入れ、全面的に停戦した。

旧ソ連はこの協定を守らず、その上、日ソ不可侵条約を一方的に破棄して八月九日、大挙満州に侵攻して大きな犠牲者を出した。関東軍将兵五十七万四千九百四十二人を「東京ダモイ」と騙しシベリア各地に強制抑留し、長期間にわたり重労働を強要され飢えと寒さに耐えきれず、病気、事故のため六万二千六百三十六人が帰国の念願を果たせず異国の地に無念の死を遂げた。

余りにも辛い体験で思い出したくない気持ちもあり、また長い年月が流れ記憶も薄れ自信がないが、生き証人として、渡満から復員、現在までを拙い文章であるが記述する。

渡満から入隊

昭和十六年十二月八日大東亜戦争が勃発して国内情勢は軍事一色で、日に日に激しさを増し戦時体制が強化された。当時は不具者、病人以外は老若男女を問わず国民皆兵で軍関係の仕事をするよう強要され、これが誇りでもあり名誉でもあった。十五、六歳の少年でも戦車兵、飛行兵、また満州開拓団等率先して志願した。

昭和十八年三月大阪旧制工業学校卒業後、関東軍軍属として採用され渡満した。関釜連絡船で釜山に上陸、朝鮮半島を縦断し満州国（現中国東北部）の新京市（現長春）南嶺に到着。二カ月間技能訓練後、佳木斯に転属、勃利県吉興鎮杏樹で軍務に従事した。日常生活は営外居住の上、将校並みで手厚い待遇を受けた。

昭和二十年五月、ドイツが無条件降伏後、ソ連軍がシベリア鉄道を経由してソ満国境に集結したとの情報が入ったため、関東軍に緊張が走り在満邦人の根こそぎ動員が始まった。

上官から持ち物、財産を日本に送るよう指示があり、軍刀、衣類、書籍、アルバム等を梱包して三江線杏樹駅から発送したが、内地には到着していなかった、途中で略奪されたいしい。

昭和二十年八月一日付で最後の現役兵として牡丹江航空通信隊へ入隊。八月五日頃、ソ連の参戦が近いという情報が入り奉天市（現瀋陽）に部隊疎開をした。昭和二十年八月九日にソ連軍は大挙して北満国境を侵攻し、在満日本人は大混乱に陥った。当時の関東軍の軍事兵力は南方へ移動配備され、国境線は手薄で満足に武器もなく、防戦苦闘し大勢の犠牲者を出した。

ソ連参戦で樺太・千島を侵略し、その上北海道の釧路と留萌を結ぶ北半分を占領する計画があったようだ。ソ連軍から在満邦人を守る目的で小隊長以下、武器弾薬、食糧を携帯して奉天市北陵町に陣地構築、迎戦準備をした。

八月十五日に日本は連合国に無条件降伏し、戦争は終わったから帰隊するよう部隊長命令が伝達

された。命令に違反すると軍法会議で処罰され、内地の親兄弟に迷惑をかけることになる。後で思えば軍隊がなくなり軍法会議などあるはずはないが、その時は命令通り帰隊した。奉天の街の治安は暗黒の世と化し、在滿邦人は混乱の中で路頭に迷い、残留孤児が出た原因ともなった。

平成十四（二〇〇二）年五月八日、瀋陽総領事館への北朝鮮人亡命事件が報道され、五十七年前の武装解除・抑留を思い出し感銘を新たにした。

シベリア抑留

昭和二十年九月上旬ソ連軍が侵攻、直ちに武装解除に応じたにもかかわらず略奪と虐待の限りを尽くし、膨大な戦略物資を自国に運び、その上日本に帰国させると欺き九百五十カ所の収容所へ強制的に抑留して自国の復興作業に従事させ、飢えと寒さと重労働の三重苦に喘ぎ、望郷の思いも虚しく無念にも異国で最期を遂げられた戦友を思うと、誠に痛恨の極みである。

昭和二十年九月下旬頃黒河に集結、黒龍江を渡りソ連国ブラゴエシチェンスクに入国した。ウラジオストツクから乗船、日本へ帰国さすという甘言にだまされ一千人単位で貨車に乗せられた。ソ連警備兵は自動小銃（マンドリン銃）を肩掛けに持つていて、途中、銃で脅し腕時計や万年筆、タオル、下着類を略奪した。輸送中、用便の小は貨車の中に穴を開け、交互に使用、大は汽車が停車中、線路の上で並んで用を足した。二十日間位シベリア鉄道を東方に走り、十月中旬頃イルクーツク州チェレンホーボ市に到着、収容所に入った。半地下式の木造建物で周囲は鉄条網が二重に張っており、四隅に高い望楼があつて警戒兵が銃を持って常時監視している。また衛兵所には兵隊が四〜五人常駐して警戒していた。この建物は囚人の刑務所らしい。小便のため鉄条網に近づいて脱走と間違えられ射殺された者がおつた。他地区では建物がなく、テント生活をしながら兵舎を自分らで苦勞して建築した所もあつたと聞いてい

る。

労働内容は、場所によつて異なるが森林伐採、
鉄道建設（バム鉄道）、炭鉱労働、農場（コル
ホーズ）、雑役等である。私は露天掘炭鉱で、勤
務は八時間の三交代で採炭、貨車積みのみ労働をし
た。地中の炭鉱は穴の中で暖かいが、寒気の厳しい
屋外では休憩時間に焚き火をして防寒外套の裾
に火の付いたのも気がつかないこともあった。ま
た地中鉱山では落盤事故が多発した。夜勤明けで
帰つて睡眠をとろうとしても騒がしかったり使役
の招集があつたりして熟睡できない。作業場への
往復には必ず人員点呼がある。二列縦隊で十人づ
つ整列させて数える。ソ連兵（下士官）は掛算が
できないので人数が合わず長時間整列させられ
る。冬季は防寒具の中の手や足をずっと動かして
いないと凍傷にかかる。外気温が零下三〇度以下
になると作業中止で兵舎で待機となる。シベリア
の季節は春夏秋冬でなく夏冬の二季節のみであ
る。夏季は三〇度以上の高温になり、冬は零下四

〇度以下で永久凍土の地区もある。寒いと言うよ
り痛い。目の前にツララが下がり瞬きが不自由に
なる。

一カ月一回身体検査があり、ソ連女軍医が診断
する。真つ裸にして臀部の皮を引っ張つて肉付、
弾力を見て等級を決める。一級、二級は重労働、
三級、四級は軽作業と決定する。体温三八度以上
の発熱でないと作業は休めない。神経痛や脚気は
病気でなく怠け病だと認めてくれず、仕事に駆り
出される。

昭和二十年の年末から二十一年冬までが一番死
亡者が多かった。栄養失調で体力が消耗している
上に伝染病が発生した。虱の媒介で発疹チフスが
発病した。隔離病棟も医薬品もなく、千人のラー
ゲルで約三百人位死亡したと聞いている。月一回
下着の熱風消毒があるが、虱の卵は縫い目に入つ
ていて体温でまた発生する。私は昭和二十二年一
月頃マラリア病にかかった。南方の暑い土地だけ
ではないようだ。午後二時頃になると震えが来

て、戦友が上から毛布をかけて押さえつけるが止まらない。約二十分位すると三八度以上の高熱が出る。毎日決まった時間に繰り返すため、食欲もなくなりすっかり衰弱した。診療所で寝ていたが重病人と認定され、チタ市の病院へ入院した。二カ月位で退院でき、官舎掃除等の軽作業に従事した。

昔から衣食足りて礼節を知るといふ諺があるが、食事が一番だと思う。一日の配給量は黒パン三〇〇グラムと高粱コリヤンか玉蜀黍トウモロコシの粉をドロドロに炊き込んだ粥だけの食事。飢餓の状態で、食事に対する執着心は今ではとても考えられない。シベリアでは馬鈴薯ジャガイモが主な副食である。空腹なので生で食べてもエグくない、皮だけでも拾って食べたこともあった。戦友同士でよく食べ物のお話をする、ポタ餅、ぜんざい、汁粉、寿司等内地での食事の話で一時的にもひもじさを紛らわした。食糧の配給は、作業基準量（ノルマ）達成者は一〇〇%支給、未達者は減食があるため益々衰弱す

る、「働かざる者食うべからず」の法則で、病弱者から率先して送還させたようだ。

復員

昭和二十二年四月頃、帰還専用列車でナホトカに到着、幕舎の収容所に入った。あと一年長く収容されていたら体力的に自信がなく恐らく生還できなかつたと思う。マラリア病に感染して苦しかったが早く帰国できてよかつたと今では思っている。ナホトカには共産党のポスター、標語、壁新聞等掲示されていた。軽作業をやりながら民主教育が厳しく、宣伝部員（アクティブ）の指導で演説を聞いたり革命歌、労働歌を歌った。反対的態度、発言をしたら「反動分子」の烙印を押され追放処分になり、また奥地の収容所へ強制送還されると聞いていたので、引揚船に乗船するまでは彼らの言う通り行動した。記録によると、ナホトカ港から引揚げが始まったのは昭和二十二年四月七日で、十二番目の引揚船永祿丸（貨物船改造）

に五月十日乗船することができた。

乗船前に点呼があり持ち物の検査、特に書物の持ち出しは禁止とのことで、戦友の本籍地等記録書を持っていたが全部放棄した。

島根県隠岐郡出身の山本幡雄という人は戦争犯罪人にされ、長期抑留の上病気で死を覚悟していたが、内地の妻子に遺言を伝えたいと思い同室の戦友四人に文面を記録してもらった。帰国後、家族に伝言が届いたと聞いている。在満当時警察官、憲兵、特務機関の職員等の職業の人は、反ソ活動、スパイ罪の戦犯で長期抑留され、最終引揚船で昭和三十一年十二月二十六日に復員している。

長い間の束縛からやっと解放されたこの感激は、今でも忘れることはできない。

舞鶴港へ上陸後、DDTの防疫粉末消毒をされ宿舎に入った。久しぶりの入浴、そして懐かしい畳の上でくつろぐ。次に復員事務手続きをし、新品の海軍軍服と手当八百円、故郷までの汽車切符

を受領した。翌日、東舞鶴駅から乗車、山陰線松江駅下車。駅前の野津旅館で一泊。朝、松江駅より木次線出雲八代駅で下車した。舞鶴から自宅へ電報を打っていたので父が駅まで迎えに来ていた。メガネフレームの弦は壊れ糸で修理、体は左右にフラフラながらも丸四年三カ月ぶりに我が家に帰ることができた。

昭和二十二年七月頃、GHQ松江駐留軍から呼出しがあり、シベリア抑留中の事情聴取を受けた。帰郷後約三カ月間の両親の手厚い看護により、栄養失調で衰弱した体も社会復帰ができる程体力が回復した。抑留中罹病したマラリア病は一度も発病しなかった。後遺症として炭鉱での粉塵による肺結核病でせつかく帰国しながら短命で死亡した者も多数いる。

私は今でも慢性胃腸病で、食事は慎重にしている。ちょっと油断するとすぐ下痢をする。

就職

昭和二十二年九月 日本発送電株式会社入社
昭和二十六年五月 中国電力株式会社に承継
昭和五十九年三月 定年退職

全抑協

昭和六十年四月 全抑協島根県連事務局長
平成十年七月 全抑協島根県連会長
平成十一年五月 財団法人全抑協理事

昭和五十三年に島根県内各市町村に支部を結成、会員数約二千人で県連合会が発足した。

その目的達成のため精力的に活動し、はや二十四年が経過したが満足な成果を挙げていない。年々会員の高齢化が進み、心身の不調や他界等により現在三百五十人の少数組織に弱体化した。しかし、幸い生き長らえた者の使命として、また証人として、あの不当で悲惨な強制抑留生活の実態を後世に残す責務がある。中央連合会に協力して最後を見届けるまで微力であるが努力したい。

慰霊碑の建立

平成六年十月二十七日、松江市北公園に慰霊碑を建立除幕した。

長く悲惨を極めた第二次大戦は連合国のポツダム宣言を日本が受諾して終戦となり、中国、南方などに駐留していた将兵は逐次送還された。しかしソ連国は、宣言を無視して在満日本軍約六十万人を酷寒シベリアの僻地に強制抑留し、長期間にわたり重労働を強制した。そして飢えと寒さと病気で体力の極限に達し、六万数千人（島根県出身者四百人）の戦友が無念の死を遂げ、今なお凍土の原始林に眠っている。よって、辛うじて生還できた体験者の責務として、望郷の念にかられながら斃れた県出身の死没者並びにせつかく生還しながら後遺症が原因で物故となられた方々のご冥福と平和を祈念する碑として長く維持する。

建立場所は松江市当局の認可を得て北公園の一角を借地した。碑文の「慰霊之碑」の揮毫は澄田県知事をお願いした。碑の姿図は抑留当時の収容

所をかたどったものである。

慰霊祭は過去四回実施、行政団体、抑留者、遺族等の参列をいただき、厳肅かつ盛大に挙行した。御霊を慰め恒久平和を祈念する目的で今後も継続して実施したいと思っている。

舞鶴引揚記念館の見学

「岸壁の母」で有名な京都府舞鶴市にある引揚記念館の見学会を計画し、平成七年四月と平成九年四月の二回実施した。舞鶴は内地に第一歩を踏み入れた懐かしい思い出の地である。沖に向かつて突き出た栈橋は復元されていたが、引揚援護局の建物は工場になっていた。公園には桜、椿の木等たくさんの記念樹があり、それぞれ標柱には寄贈した戦友会の名称が表示してあった。

舞鶴港は昭和二十年から三十三年まで十三年間引揚港として使命を果たした。展示品はナホトカからの引揚船の入港記録（船名、模型、入港年月日、上陸人員）、収容所の模型、抑留生活用品の

展示やビデオ放映、係員の説明もある。

シベリア慰霊訪問

平成十一年八月二十三日から八月三十日まで、平成十一年度慰霊訪問に第五班の団長として参加した。現地で無念の死を遂げた戦友の霊を慰めると共に、埋葬地墓地の現状調査をして関係機関に報告するのが目的である。当初希望者が三十二人であったが、健康上その他の理由で取り止めた方があり、最終的に体験者十二人、家族四人で十六人編成になった。団員の出身地は北海道から九州まで全国にわたり、初対面で責務が果たせるか不安であったが、抑留中辛酸を体験した戦友同志であり、すぐに打ち解け、思い出話や近況報告等話題も豊富で終始和やかに行動することができた。

訪問地はタイセット地区四カ所、イルクーツク地区二カ所、バイカル湖地区一カ所、チェレンホーボ地区二カ所、ハバロフスク地区二カ所の計十一カ所巡拝した。今回新しく埋葬場所二カ所を

発見した。内地から持参した墓標「友よ安らかに眠れ」を建て、日の丸と協会旗を張り慰霊祭の式典を挙行した。清酒、煙草、菓子、果物、ローソク、線香、家族の写真、そして現地購入の生花等をお供え、開会の言葉、黙禱、追悼の辞、国歌、軍歌、「異国の丘」を合唱、最後に閉会の言葉で慰霊祭を終了した。墓地は森林の中に無数の土饅頭で盛り上がった所、長方形に落ち込んだ所等、埋葬場所は判別できる。遺骨収集については厚生労働省主管で三カ年計画で実施するように聞いているが、一日も早く祖国日本に持ち帰り、東京千鳥ヶ淵戦没者墓苑に納骨されるよう強く要望する。

新潟空港からハバロフスク空港までは国際線のため飛行機は日航のみで立派だが、国内線のハバロフスクからイルクーツク間の飛行機は、機内の絨毯は破れていて歩くと引つかかるし、シートベルトは破損していた。また出発時間は不定期だし、事故が発生しないか大変心配した。交通機関

はシベリア鉄道で車中泊二泊したが、寝台車は狭いし、シート、枕カバーは紙製、おまけに満員で睡眠がとれない。また道路状態は悪く、市街地以外は舗装はなく悪路、バスはボンネットがなくエンジンには剥き出し、車検はないとのこと。途中、橋が落ちて徒歩の所があった。

旅行中幾多の困難はあったが、団員の協力により無事日程を消化し、全員無事故で所期の目的を達成でき、有意義な旅行であった。

北朝鮮も終戦時ソ連の指揮下であり、多数抑留され多くの犠牲者が出ているが、現在国交がないため墓参も遺骨収集もできない。誠に残念である。

あとがき

体験者の平均年齢は八十二、三歳と思う。私も傘寿を迎える年となり、体力気力とも衰えを感じるようになった。しかし後継者がいないので、老骨に鞭打ちながら最後まで会の運営に努力したい

と思っっている。

シベリア抑留で最低の生活を経験し九死に一生を得た体験を思えば、いかなる苦難も耐えられるだけの根性は持つことができたと自負している。

最後に、シベリアの極寒の地で無念の死を遂げた同胞の皆様のご冥福を衷心より祈念して、筆をおく。

【執筆者の紹介】

現住所 松江市南平台

本籍地 島根県仁多郡布勢村大字八代

生年月日 大正十四年三月十四日

入隊 昭和二十年八月一日

終戦当時の居住地 満州国奉天市

入ソ日 昭和二十年十月二日

抑留地 イルクーツク州チェレンホーボ

作業 炭坑

引揚船 永祿丸(昭和二十二年五月十日入港、

十二番目)

上陸地 舞鶴

本田さんは復員後、中国電力株式会社に就職、昭和五十九年三月定年退職されるまで三十数年の長期にわたり勤務し、仕事熱心と人望によって幾多要職にもつかれて皆から敬慕されていた。

昭和六十年四月より全抑協島根県連合会の副会長兼事務局長として江角、松浦両会長を補佐し、その間、平成六年の慰霊碑建立事業と平成九年のシベリア抑留関係展示会が見事成功した陰には、本田さんの抜群のご配意と卓越した事務処理がなされたからできたものと大変感謝しております。

平成十年七月、県連の会長職を引き継がれてからは、財団法人全国強制抑留者協会の理事として中央でのご活躍はもちろんのこと、持ち前の積極性と指導力を発揮されて、会員高齢化のため沈滞がちな各支部の活性化に努力と情熱を注いでおられる姿勢は誠に立派で、頭が下がる思いであります。

最後になりましたが、平成四年から、株式会社佐藤組に嘱託として入社し、用地業務に今も敏腕を振るっておられることを書き添えておきます。

(島根県 星野 誠一)

シベリア抑留記

広島県 原 修 三

私は大正四(一九一五)年生まれで、現在既に八十七歳である。兵歴は昭和十(一九三五)年徴集で甲種合格となり、昭和十一年一月、福山歩兵第四一連隊に入営、昭和十二年七月九日帰休除隊の予定のところ、当日の午前五時、突如週番七官集合のラッパがあり、本日の除隊者は集合、本日の除隊者の除隊は一時中止となる。そのことは既にご存じのように、当年七月七日の蘆溝橋事件により京都以西の各部隊の帰休除隊は中止となる。既に近郊の町村からは除隊出迎えの代表者が「祝

除隊」の旗をかざして営門前に集まっており、私のように遠い所でも役場の兵事掛と身内の代表が出向いていた。面会不可能ということで、なす術はなく落胆の極に達した。

しかし事態は刻々と進行し、応急動員から本動員となり、動員計画により応召、戦時態勢の部隊編成となり、同年八月一日には字品を出港、釜山經由により日中戦争に入る。私は伍長勤務上等兵で小隊の第六分隊長として参戦。同年八月七日、長城線の八達嶺が初戦場で、約一週間、長城線の警備に就く。以降、北京を通過、徐州、徐州へと毎日十キロの強行軍で疲労はその極に達す。正定まで進行、大休止となり、入浴もあり徐々に手足を伸ばし休養した時既に九月初め、思いもよらぬ変化到来、部隊は速やかに天津に集結の命下る。補充部隊到着もあり、我々の歩兵四一連隊に山砲部隊の旅団編成となり、九月中旬天津を出港、南方に向け発進、左右を護衛艦に守られて前進。我々下級者には何のためにどこへ行くのか分から